

提督は存在するはずのない天龍型の三番艦!?

戦闘狂の道化師

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ラバウルに天龍、龍田と共に着任した提督は元人間の艦娘!?この物語はラバウルで自分自身の状況や急にできた二人の姉の事を悩みながらも艦娘と共に提督が頑張る物語

# 目次

提督は……	1
海龍のプリンと姉と鎮守府の母達	5
海駆ける龍 ブルネイへ	8

提督は……

昼下がりに、とある鎮守府の執務室には二人の女性の楽しげな声と一人の女性の恥ずかしげな声が響いていた。

「はあ……」

「どうしましたの？海龍ちゃん？」

「辛気くさい顔してどうした？海龍？」

執務室で提督は天龍と龍田に着せ替え人形にされていた。ゴスロリ、チャイナ服、セーラー服にメイド服と次から次へと着せ替えられている提督は決して天龍と龍田にこうして遊ばれるのは決して嫌いでは無いし嫌でもない。ただあるものがどうしても楽しむ心を邪魔をするのだ。男の尊厳が……。

「そろそろ仕事をさせてくれませんか……？お姉ちゃん？」

「姉相手に意見とは偉くなったものだな？海龍？」（お姉ちゃん相手に偉くなったものね？海龍ちゃん？お仕置きしちやおうかしら？）

まあ、今の彼には一時的とはいえ、立派な胸部装甲が着いて股間の大砲は無いため男ではないし揉みくちやにされながら涙目で叫ぶ姿には男の尊厳どころか提督としての威厳と言うものは一切ない。

「仕事させて〜!!」

「ダメだぜ♪」（ダメよ♪）」

彼がこうなったのは一年前まで遡る。

一年前、彼は友人と共に海軍学校を卒業し、新米の提督として何処かに派遣されるはずのごく普通の男だった。だが、彼の人生は海軍学校を卒業した日に元帥に呼び出された事により大きく変化することになる。

「君が黒鉄 新夜で間違えはないかな？」

「は、はい」

この時新夜は、ドキドキしていた。それもそうだろう学校を卒業し

たらすぐに海軍元帥に呼び出されているのだから。

「私は君の祖父とは友人で君が小さい頃に出会った事があるんだよ」

「そうなのですか!？」

急に知らされた自分の祖父と元帥、それと自分の関係にびっくりしながらも彼の頭は何故呼び出されるのだろうと言う疑問に包まれたままである。その後元帥に進められ元帥と向かい合って座った彼は暫く黙っていたが話を切り出した。

「何故私は呼び出されたのでしょうか？」

「ふむ…… 実に言いにくい事なのだが……」

新夜が構いませんと言うと元帥は説明を始めた。

「今、提督にも敵と戦う力を持たせるべきと言う話が海軍内に出ておつてな。それで君の祖父に相談したところ君自身が構わないと言うなら孫を使って試してみればいいと仰られてな……」

「私は海軍のため国民のためそして家族のためなら何でもいたします!!。どうぞお使いください」

彼は父を深海棲艦との戦いで亡くしている。別に深海棲艦を恨んで海軍に入ったわけではない。これは戦争なのだ。お前達が急に襲いかかってこなければと言う事でもない。むしろ人間が深海棲艦の逆鱗に触れるようなことをしたのかもしれない。きっかけがなんにせよもう戦争は起こってしまったの。もう敵を撃つしか人類が生き残る術はないのだ。彼にとってはもう自分のように誰かを失って嘆く者を一人でも減らしたいその一心だった。

「そうか…… 入りなさい」

元帥がそう言うどアが開き二人の艦娘が入ってきた。新夜は海軍学校の授業で学んでいたため入ってきた艦娘が誰だかすぐに理解した。好戦的な姉の天龍におっとりしているようで天龍絡みと怒らせると怖くなる龍田であった。

「彼を例の場所へ連れて行ってくれ」

天龍達に付き添われ彼が着いた場所は艦娘用の医務室であった。中に入ると部屋の真ん中には一つの血液パックと輸血用の道具一式が置かれており更には献血の道具も揃っている。新夜がビツクリし

ていると、

「は〜い、あなたが新夜さんですね。提督艦娘化実験に参加してくれてありがとうございます」

工作艦 明石が来て新夜に椅子に座るように指示する。彼が椅子に座ると明石が怖いことを言い出した。

「それじゃあ血を半分抜きますからね〜」

「ちよつと待ってください!?それって死んじゃいますよね!」

「大丈夫です。血を抜きながら輸血しますから… 艦娘の血を…」

明石はそう言うと言と新夜の右腕に献血用の管に繋がる針を刺し血を抜き始めた。新夜も抵抗するだけ無駄だとなされるがままにし椅子に深く座り直した。段々と体から熱がなくなっていくような感じにして眠くなつていき彼は夢の世界へと旅立っていった。

「終わりましたよ〜」

明石に起こされたのはかれこれ二時間後で彼が起き上がって見ても特に変化は無いようだった。別に体がダルい訳でもなく何処か一部が変化しているわけでもない。

「飲んでください」

不思議に思っていると明石が新夜に一粒の赤い怪しげな錠剤を渡してきた。新夜はもう自棄になり薬を飲み込むと…

「な、な、何だこれ!」

段々と胸が膨らんでいってC位のサイズまで育って行って髪も腰ぐらゐまで伸びていった。そしてふと違和感を感じて股間に手を当てると…

「無い?」

何時もどんな時もそこにあつた大砲が無くなっていた。

「提督を艦娘にする実験成功ですね。此方に着替えてくださいね?」

明石にそう言われながら手渡されたのは天龍と龍田が着ている制服と良く似たものだった。新夜は明石から下着の着け方が書かれている紙を受けると制服を持って更衣室に入って苦労しながら着替えていった。

「着替えましたよ」

「それじゃあ出てきてください。どうぞ!!」

明石の声に従いカーテンを開けて出てみると天龍達と似た少し気の弱そうな少女が正面に置かれた姿鏡に映っていた。

「天龍型 三番艦の海龍の完成です!!」

こうして彼は提督でありながら天龍型の存在しない筈の三番艦の海龍になったのであった。

## 海龍のプリンと姉と鎮守府の母達

「あゝ!!また食べられちゃった……」

本日も執務が無事に終わった真夜中の執務室の隣の仮眠室から、海龍の悲しげな声が聞こえてくる。原因は海龍の手元にある空のプリンが入っていた入れ物にあった。

新夜が海龍となった後、提督になるために学校で学んでいた頃から変わったことがある。身体能力の上昇に体が丈夫になりそして……

妙に甘いものを食べたくなる事だった。女の子になったからなのか海龍は甘いものをよく食べる様になり、その中でもプリンが大好きになった。それでも毎日食べるのはいけないと三日に一回、執務終わりに食べるのが海龍の自分へご褒美となった。一応言っておくが海龍は朝から執務して昼には天龍や龍田そしてこの鎮守府で建造したり海域を攻略中に発見した艦娘と海域攻略もしくは訓練と一緒にしたりし、夜にはまた執務とかなり忙しく働いているため毎日食べても問題ないくらい働いてはいるので、一部の艦娘に心配されているのだが海龍はその事を知らない。

「プリン♪プリン♪」

その中でも海龍が一番の楽しみにしている日は各月の終わりに食べる、プリンの上に生クリームや果物が乗っているプリン。ア・ラ・モードの様になっているプリンであった。そんなウキウキ気分的大海龍が仮眠室に置いてある冷蔵庫に行ったのであったそこに置いておいたプリンは無くゴミ箱にカップだけが残っていた。どうやら龍田に食べられてしまったようだ。天龍達は海龍をとっても可愛がって居るのだがたまに龍田は海龍の泣き顔が見たいのか、たまに海龍のプリンを食べて……

「海龍ちゃん可愛い……♪」

この様にドアの隙間から覗いたりしている。もし天龍が食べてしまった場合は『プリン食べちゃった。すまない』と書き置きを残すと言う可愛らしい行動をしたりしている。

「プリン食べたかったな……」



「提督？起きていますか？」

そう本当に泣きそうな顔で呟く海龍の元に来たのは軽空母の鳳翔に間宮に伊良湖の三人だった。この鎮守府では海龍が提督と知っているのはこの三人と天龍、龍田だけであり他の艦娘は海龍が秘書艦で提督は執務室の隣の仮眠室に籠っていると考えている。

「鳳翔さん、伊良湖さん……間宮さん……」

「どうしたのですか？ああまた食べられちゃったのですね。間宮ちゃん？悪いのだけどプリン・ア・ラ・モードをつくって持ってきてもらえますか？」

「はい!! 鳳翔さん。伊良湖ちゃん手伝ってもらえる？」

「はい!!」

海龍の右手に持たれている空のカップを見た鳳翔は全てを悟り間宮達にプリン・ア・ラ・モードを作る事を頼むと自分は海龍の側に行き頭を撫でた。

「何で撫でるんですか／＼／＼」

「撫でたいからです♪」

鳳翔はそれから海龍の頭を撫でたり抱き締めたりしていると仮眠室のドアが叩かれる。

「出来ましたよ〜」

「わあ〜美味しそう!!」

少しドアの隙間から覗いている艦娘を呆れた顔見た後すぐに笑顔になって中に入ってきた間宮達が持っていたのは何時もは大人しい海龍すらテンションが上がるほど美味しそうにプリンを大量のフルーツと生クリームで盛り付けたプリン・ア・ラ・モードだった。

「いただきます♪」

海龍は間宮達からプリン・ア・ラ・モードを受けると眩しいほどの笑顔でパクパクと食べた。

（（可愛い……）可愛いわね〜）

鳳翔達とドアの隙間から覗く天龍型の次女が微笑んだり顔を赤らめたりしながら眺めている中、海龍はニコニコと上機嫌で食べていき10分ほど食べ終わると。

「ふあゝ…眠くなつてきちゃつた…」

甘いものを食べて満足したのか海龍は可愛らしく欠伸をするとそのまま眠ってしまった。鳳翔は可愛い寝息を漏らす海龍を優しく受け止めると伊良湖達に布団を敷いてもらい布団に優しく海龍を寝かし海龍が風邪を引かないように毛布を優しくかけると三人はこつそりと起こさないように部屋から出ていく時にはドアの隙間から覗いていた龍田はもういなかった。

真つ暗になつた部屋の天上裏には怪しく光る赤い目を持つ狂犬と夜戦忍者がいた。

「海龍に誰か男が手を出そうものなら殺してやる」

「海龍さんは私達が守るつぽゝい…。私達を助けてくれた見たいに…」

他の鎮守府で捨て駒にされて海龍に助けられた過去を持つ二人は何処までも濁つた目で天上から海龍の寝顔を見ながらそう呟いていた…。

そうして二人はゆらりと闇夜に消えていった。今日もラバウル鎮守府は平和である。

## 海駆ける龍　ブルネイへ

寝る前にプリンを食べてぐっすりと眠った翌日の昼、海龍は燦々と照りつける太陽の下、姉の天龍と龍田に川内と夕立最後に夕張を連れて演習先の鎮守府に向かって縦列陣で航海していた。目的地は海龍の海軍学校時代の友人が指揮を執る鎮守府があるブルネイ。依頼は海龍一人と油断しやすい艦娘四名による演習がしたいと言うものであったので海龍は天龍と龍田を連れ3人で行こうとしていたが天龍達に護衛をつけろと言われ近くにいた川内と夕立、ちようど通りかかった夕張を加えた艦隊で航行することになった。

「お姉ちゃん達だけで良かったのに……」

「そんなこと言っちゃって、もし敵に囲まれたりしたらどうするの？海龍ちゃんが死んじゃったら私達だけじゃなくて私達がいる鎮守府にいる皆が悲しむわよ？」

龍田がそう言うその後ろからそうだ、そうだと龍田に同意する声が聞こえてくる。海龍は自分の好かれ具合に驚きながらもお礼を言うとその後は皆と楽しく会話をしたりお菓子を食べたり深海棲艦と交戦したり、夜になると途中にあった島で夜営をしたりしながら航海して行くのであった。

海龍達がブルネイの鎮守府に着いたのは三日目の昼だった。数分前にそろそろ着くとブルネイ鎮守府に連絡した海龍がブルネイ鎮守府に到着すると銀髪の短いツインテールの艦娘が出迎えた。

「ようこそ、ブルネイ鎮守府へ。私は香取型の二番艦練習巡洋艦の鹿島です。よろしくお願いします」

「旗艦の天龍型　三番艦　海龍です。よろしくお願いします……。この鎮守府の提督にご挨拶したいので案内をお願いします」

海龍が、そう頼むと鹿島は笑みを浮かべると快く案内を執務室まで案内をしてくれた。

「提督、ラバウル鎮守府の皆さんをお連れしました」

「は〜い。入って」

返事な聞こえたので失礼しますと声をかけながら海龍達が執務室に入ると、書類と格闘している若い一人の男性がいた。

「よく来たね。僕がブルネイ鎮守府の提督の物部 時宗だ」

時宗は海龍達に笑いかけながら自己紹介するがその間も手は書類にサインをしたり忙しく動いている。

「どうも、この艦隊の旗艦の天龍型 三番艦 海龍です」

時宗は海龍の自己紹介を聞くと海龍達を一人一人見ていくところと言った。

「新夜はいないのか？あいつの性格的にもついてくると思ったのだが……」

黒鉄 新夜。海龍のもうひとつの名前。海龍は今、この場所ですぐに自分がそうだと時宗に伝えてあげたいがその前に……後ろで自分のスカートの裾を握ってぶるぶると震えながら過去のフラッシュバックに苦しみ過呼吸に陥っている川内と夕立の二人を下げないと倒れてしまいそうだ。

「その事につきましては説明しますので先に川内と夕立の体調が悪そうなので客室か何かで休ませてあげて欲しいのですが……」

そう言うとき宗は鹿島に川内と夕立を客室に連れていくのを頼み夕張もそれに同行していった。夕立達は前の鎮守府で捨て駒に、されたせいで提督という存在を恐怖してしまっている。海龍はその事を知っているために速く部屋から出してあげないとなと思っていた。最初から夕立達は執務室に入らせないと言う選択肢もあったが自分を心配する表情の二人にはそんな事言えずここまで連れてきたのだった。夕立達は言われた瞬間海龍を大丈夫？と言う表情でまた見つめてきたが天龍達がいるから大丈夫と伝えると鹿島達は部屋を出た。

「では、提督が着いてきていない説明をしますがその前に準備がありますので少しお待ちください」

海龍はそう言うとき執務室の隣の部屋に行くと鞆の中からかなり

久々に着る軍服を、取りだし袖を通すと執務室に戻っていった。

「お待たせしました。龍田お姉ちゃんお願い？」

「今日は特別よろしく？」

急に軍服を着てきた海龍に驚いている時宗をほっといて軍服に身を包んだ海龍は龍田から青い錠剤を受けとると飲み込む。変化はすぐに現れた。腰ほどまでであった髪は短くなり胸は無くなり、身長は少し伸びた。

「ひさしぶりだな。時宗」

「えっ?!新夜?海龍ちゃんはどこいった!？」

海龍が居なくなり新夜になったことを手品かなにかと思つて狼狽えている時宗に……

「海龍は俺だ」

新夜がそう言うのと龍田が勝手に軍服のズボンからタブレットケースを取りだし新夜の口に赤い錠剤を放り込むとまた髪が伸び胸が膨らみ海龍に戻っていった。

「こう言う事です」

開いた口が塞がらない時宗に海龍はこうなつた説明を始めた。自分は海軍学校を卒業したあの日、提督艦娘化実験の実験体となりその実験は成功した事、その実験は様々な疑念や人道的に問題視されすぐに凍結された事、龍田に艦娘から人間に戻る薬を取られていて人間に戻るのは重大な会議ぐらいのものだとか、この姿では絶対に海龍という唯一一人だけいる艦娘として接して欲しいなどと様々な事を言う時宗は少し啞然としていたがすぐに友達の頼みならと受け入れてくれた。

「演習は明日の10時(ヒトマルマルマル)に始めよう。こちらの編成は重巡洋艦二隻軽空母一隻駆逐艦一隻だ。最初は駆逐艦四隻の予定だったから海龍だけをお願いしたんだけど戦力が余りにも変わりすぎているからそちらは三人に変更したいけど誰が出る?」

「わかりました。ですが……えっと……まず何故此方の数が少ないのでしょうか?」

「そうだな、元々は駆逐艦の子達が油断しやすいからそこら辺を諫め

る目的だったんだけど、よくよく考えたら入れ換えた三人は油断しや  
すいからね。そこら辺を変えさせておかないと彼女達が危険だから  
ね」

「了解しました。それでは私と天龍お姉ちゃんと龍田お姉ちゃんでお  
願います。それでは数日間お世話になります」

海龍は時宗に、敬礼して部屋を出ると天龍型の制服にとなりで着替  
え直し、ブルネイで割り当てられた部屋に再び戻ってきた鹿島に連れ  
て行って貰い、部屋の中で海龍は天龍と竜田にラバウルでは長々休め  
ないだろうからとこれでもかと甘やかされて日頃の疲れを癒して  
いった。